

男性学における当事者主義の批判的検討 川口遼

序章

近年、人文・社会科学の領域で男性性に関する注目が高まっている。女性学は、客観性の名の下に「女の経験」を貶めてきたアカデミズムの男性中心主義を鋭く告発したが、それは同時に性差別を女性問題に還元し女性学をゲットー化する危険性も帯びていた(上野, 2006)。女性学からジェンダー研究への展開は、このゲットー化を打破し、非対称的かつ二項対立的なジェンダー秩序の構築過程へと分析の射程を広げるためのものであった。しかし、宮下さおりが振り返るように「このことは理論的には意識されてきたものの、実際のところ、ジェンダーという概念を早くから取り上げ、社会科学における議論をいち早くリードしてきた社会学の領域においても、分析の努力は、女性の経験に集中」(宮下, 2006, p. 1)してきた。このような背景の中、ジェンダーの視点から男性および男性性が研究されるようになってきている。

欧米では 1990 年代以降、『Men and Masculinities』や『Journal of New Men's Studies』といった専門学術誌が発行されるなど、社会学にとどまらず歴史学、政治学、文化人類学などの分野において男性と男性性に対する批判的な研究が数多く存在する。¹また、最近の研究は男性性の歴史的地域的な文脈依存性を前提としているので、アフリカ、中南米、日本を含んだアジア諸国など欧米以外の地域社会も研究の対象として取り上げられている。²

一方、日本では男性性の批判的検討は男性学の名のもとに行われることが多かった。初期の男性学は「男性にとってより“人間らしい”生活を構想するための(それは、女性にとっても望ましいことだろう)“実践的な学”」(伊藤, 1996, p. 130)という定義からもわかるように、研究というよりも社会的な啓蒙といった性格を持っていた。事実、1990 年代には、冷戦の終結によるグローバリゼーションの激化とバブル崩壊後の長期不況を背景に、男性の生のあり方の変革を訴える男性学は一般社会から注目を集めるようになった。その後、より若い世代の社会学者によりいくつかの著作、論文が発表されるようになったが、その数は英語で発表されたものに比べると圧倒的に少ない。

また、日本の男性学は当初よりその関心を男性の心理的な抑圧に先鋭化させており、構造的な性差別を見逃していると一部のフェミニストから批判を受けてきた(上野, 1989)。この男性学とフェミニズムの緊張関係がもっとも露になったのが渋谷知美による男性学批判である。渋谷は、男性学は男性個人の心理的抑圧に着目する結果、「「集団としての男性」と「集団としての女性」の間に存在する不平等をみえなく」(渋谷, 2001, p. 78)させているとした。このような状況の中、「男性学」ではなく「男性性研究」を名乗り、現代日本社会における男性

性の問題を分析する試みもなされている(片田孫, 2003; 片田孫, 2005; 佐々木, 2005)。しかし、そのような試みの中で渋谷の指摘した男性学の問題点を正面から取り上げ議論しているものはない。男性学の課題を乗り越えるためにも、その批判的検討が現在、求められているのではないだろうか。

本論文では、渋谷による男性学批判と男性学研究者である田中俊之(2002)と多賀太(2006)による反論を参考にしながら男性学が抱える方法論的課題を改めてあぶりだし、それを乗り越えるための方法を検討する。第1章では、渋谷、田中、多賀の議論を振り返り、論点を明確にする。ここでは、三者とも男性学が男性の個人レベルの心理的抑圧に着目するという心理主義的傾向を持っていることを共通認識とした上で、個人レベルの心理的抑圧を分析することが性差別的な構造に結びつくかどうか争われていることを明らかにする。また、田中と多賀の反論が性差別的な構造として男性規範のみを想定することによって成り立っていることを確認するとともに、その限界について議論する。続いて第2章では、渋谷が批判する男性学の心理主義的傾向が、実は渋谷自身も前提とする当事者主義と深い関係にあることを明らかにする。さらに、当事者主義が男性学の分析範囲を狭める以外に、男性間の差異を二次的なものとしてしまうととも既存の「男性」カテゴリーを再生産するという問題を抱えていることを明らかにする。最後に第3章にて、当事者主義が生み出す諸問題を乗り越える方法を素描する。

1. 男性学の方法論

渋谷(2001)は「フェミニスト男性研究」の視点と方法」と題した論文において、男性学および男性研究の方法論を批判的に検討した。この批判に対して、男性学研究者である田中と多賀が応答している。本章では、三者の議論をレビューし改めて男性学が抱える方法論的課題を明確にする。そのうえで、渋谷の批判に対する田中、多賀の反論の有効性について検討する。

1.1. 渋谷知美の男性学批判

渋谷は前述の論文で男性学の中心的な概念として「男らしさの鎧」、「男性の被抑圧性」、「男らしさの複数性」、「男女の対称性」の四つをあげ、これらを批判的に検討している。

「男らしさの鎧」とは日本において最も影響力のある男性学研究者、伊藤公雄の著作において中心的な位置をしめる概念である。伊藤(1993; 1996)は、男らしさを権力・支配・優越志向に代表される心理的特徴としており、これを社会化の結果としたうえで、この男らしさが鎧のように男性を束縛していると主張する。そして、この鎧を男性が脱ぐことが出来れば、「男性自身にとってもプラスの結果を生むとともに、女性や同性愛者に対しても、これまでの社会的排除や差別からの自由な社会を作り出す」(伊藤, 1996, p. 150)とする。これに対し、渋谷は「男

らしさの鎧」の廃棄が男性の解放にとって至上命題であることは間違いない」(渋谷, 2001, p. 3-4)としながらも、この概念があくまで男性の意識にのみ注目しており、制度的、構造的な差別に対する配慮がないと指摘する。渋谷によると、男性の心理的な解放が「女性や同性愛者等」をも解放するとするのは、男性解放がもっとも忌むべき万能主義、拡張主義」(渋谷, 2001, p. 4)である。

さらに、渋谷は男性学が「男性の被抑圧性」に着目する傾向があるとする。後に詳しくみるが男性学は、女性学が男性を支配者としてしか描いてこなかったことを批判し、それとは異なるより複雑な男性像を提示することを存在理由の1つとしている。男性の男性であるがために受ける抑圧に着目することが男性学の1つの特徴と言えるだろう。渋谷は、伊藤の「層としての男性」は、「層としての女性」に対して抑圧する立場にありつづけてきた。[...]しかし、個々の男たちにといいれば、男性たちもまた、この男性社会によって抑圧されているのも事実なのだ」(伊藤, 1996, p. 312-3)という議論を「男らしさの鎧」論同様、問題を個人のレベルに還元していると批判する。渋谷によると例えば、伊藤が男性の抑圧の事例としてとりあげる「過労死」や「自殺」は、男性がそれらを導くだけの地位や責任につきやすいという特権と関係している可能性がある。もしそうであれば、この男性の抑圧は「特権」につきまとうコストでしかなく、その解消は個人レベルでは不可能であり、現代の産業構造など構造的な変革が必要となる。「男性の被抑圧性」を個人レベルに還元しては「おそらく制度的に埋め込まれている男性の「被抑圧性」を解消するのは困難」(渋谷, 2001, p. 76)であり、そればかりか「制度面での男女の非対称性を無視した「男性の犠牲者化 victimization」に陥る危険」(渋谷, 2001, p. 76)があると渋谷は主張する。

また、「男らしさの複数性」とは、R. W. コンネルの著書『Masculinities』の議論をふまえ、多くの日本の男性学研究者が採用する概念である。男性学研究者は、これによって女性学が描き出す支配的な男性像に限らない複雑な男性の経験が描き出せるとする。渋谷は、男性性が複数あること、人種や階級・階層などを機軸として多様性が男性に存在することを認めるが、そのような「類型化」は複数性男性[sic]というジェンダー内部の差異を詳細に説明しても、男／女カテゴリーの間に横たわる差異を説明しない」(2001, p. 76)と批判する。

そして、「男女の対称性」とは、項としての男女に互換性があり、入れ替えが可能であることを意味する。渋谷は、伊藤の「男性たちもまた、この男性社会によって抑圧されている」(伊藤, 1996, p. 313)、「男性もまた[...]窮屈な思いをしている部分があるのではないか」(伊藤, 1996, p. 355)といった語りが「メタレベルにおける「被抑圧者」としての男女の対称性を読者に印象づける可能性がある」(渋谷, 2001, p. 77)とする。さらに多賀の「第1に、女性が「自分らしさ」と「女らしさ」との葛藤を経験するように男性も「自分らしさ」(個人的アイデン

ティティ)と「男らしさ」(ジェンダー・アイデンティティ)の葛藤を経験する。[...]第2に、女性性が一枚岩でないのと同様に、男性性もまた一枚岩ではない」(多賀, 1996, p. 59-60)という主張も男女の対称性を強調しているとする。しかし、このような「男女の対称性」の発見は、家父長制下における「男女間の権力関係を脱コンテクスト化」(渋谷, 2001, p. 78)したときにのみに可能である。渋谷は「男性も抑圧されている」という言い方が、「男性のほうが抑圧されている」という極端な言説に展開しやすい」(渋谷, 2001, p. 456)とし、「男女の対称性」を強調することに警鐘をならす。

渋谷によると日本の男性学は「その関心を心理/個人レベルの問題に先鋭化させ、制度的/構造的な分析を等閑視」(渋谷, 2001, p. 69)するきらいがあり、その結果、「集団としての男性」と「集団としての女性」の間に存在する不平等をみえなく」(渋谷, 2001, p. 78)させているとなる。さらに、「男性学/男性研究の区別、男性学/女性学の区別が廃棄されるためにこそ、21世紀もしばらくは党派的な方針」(渋谷, 2001, p. 461)を維持すべきだとし、女性学がとるべき男性研究の視点として「向フェミニズム的な男性研究(フェミニスト男性研究)」(渋谷, 2001, p. 458)を構想する。具体的には、第1に「男らしさの複数性」を越えた男性の権益に着目する」(渋谷, 2001, p. 460)こと、第2に「男性の「被抑圧性」が男性の「特権性」からどれだけ自由かを見極める」(渋谷, 2001, p. 460)ことを提案する。

1.2. 田中俊之の反論

渋谷の男性学批判を踏まえ、男性学研究者である田中(2002)は「男性性の社会学的考察のために」と題した論文で渋谷とは異なる方法論を提示した。田中は、J. バトラーの「おそらく「セックス」と呼ばれるこの構築物こそ、ジェンダーと同様に、社会的に構築されたものである。実際おそらくセックスはつねにすでにジェンダーなのだ」(バトラー, 1999, p. 28)という言明を踏まえ男性性を定義する。それによると男性性とは「ある「身体的差異」にそれが適用されることによって、<男性>/「男性」を構築するカテゴリー装置」(田中, 2002, p. 192)となる。³つまり、田中が構想する男性性の社会学的考察とは、「<男性>/「男性」が示す「本質的」な特徴として男性性を把握するのではなく」(田中, 2002, p. 192)、むしろ反対に、「<男性>/「男性」の持つ「本質的」な特徴としての男性性という認識」(田中, 2002, p. 192)の構築過程に焦点をあてるものである。この「<男性>/「男性」の持つ「本質的」な特徴としての男性性という認識」は、性別秩序が「男性/女性」を非対称的に編成する中で構築されると考えられている。そして、「日常生活において、「男性」は自らに割り振られ[sic]男性性を妥当なものとして自明視しそれに基づいた実践」(田中, 2002, p. 193)を行っており、「また、そうした実践によって、既存の性別秩序が産出されて」(田中, 2002, p. 193)もいる。つ

まり、男性性を割り振る既存の性別秩序と個人の実践は循環的な関係にあると田中は捉えている。田中は、この既存の性別秩序を渋谷のいう「制度」や「構造」として想定している。そして、これが個人的な実践と関連づけられることから「自分」が経験した出来事を足がかりとして、何が男性性として構築されているのかを、性別秩序という構造と結びつけて考察することは、可能」(田中, 2002, p. 196)だと主張する。

1.3. 多賀太の反論

同じく男性学研究者である多賀は男性を対象としたジェンダー研究が増加する一方、「男性学の方法論についての議論は、依然として未成熟であるように思える」(多賀, 2006, p. 198)と述べ、著書『男らしさの社会学』の中で一章を方法論の議論に割いている。

多賀は、男性性を「男性が何をすべきかを指し示した知」(多賀, 2006, p. 18)と定義し、「男性性の意味と個々の男性のあり方は相互規定関係にある」(多賀, 2006, p. 18)とする。さらに、複数の男性性間に階層性を見出すコンネルの議論をもとに「男性支配の重層性」(多賀, 2006, p. 22)という概念を提示する。階層化された複数の男性性のなかで覇権を握る男性性は女性性と他の従属的な男性性の両方を支配すると考えられる。このことから多賀は「フェミニストが「家父長制」と呼んできた男性支配の社会構造は[...]すべての男性がすべての女性を同じように支配するという単純な構造ではなく、特定のタイプの男性性が、女性性と他のタイプの男性性を従属させることによって、全体としての男性による女性支配を正当化するという構造」(多賀, 2006, p. 23)であると主張する。これは、渋谷による男性学が性差別を等閑視し男性を犠牲者化しているという批判に対する応答となる。この議論の枠組みでは、従属的な男性性を体現する者であれば、女性性を劣位におく家父長制の中で抑圧されていることになり、この被抑圧経験から議論を始めることは、性差別の等閑視にも男性の犠牲者化にもつながらないことになる。

1.4. 反論の有効性

多賀は先に見たように男性性を「男性が何をすべきかを指し示した知」(多賀, 2006, p. 18)、つまり男性規範として定義している。その上で構造と実践の関係をA. ギデンズにならって二項対立的なものではなく、お互いがお互いの(再)産出の基盤となるような二重性のあるものとして捉えている。一方、田中は、構造と実践の関係を以下のように説明する。

「男性」として生きる個人が、「自分」が「男性」であるという理由で、「仕事を休む」ことが困難だと判断したとする。その時、「仕事を休む」という行為が不適切であると判断したのは「自分」である。つまり、その経験は、個人レベルでの経験である。[...]ある「男性」が自

らの行為を不適切である、と判断したのは、あくまでも個人レベルの経験ではあるが、その判断を促したものは、何だろうか。第一に、「男性」自身が、男性性に配分された「家族を養い守るのは、男の責任である」という規範を、有効かつ妥当な知識であると認識し、実践している、ということがあげられる。第二に周囲の人々が、「家族を養い守るのは、男の責任である」という規範を有効かつ妥当な知識であると認識し、「男性」が「仕事を休む」という選択をしないことを「やむを得ない」と判断している、と考えられる。このような「男性」自身と周囲の人びとの判断を正当化しているものこそ、既存の性別秩序ではないか。個人レベルの経験であっても、その経験は社会的なレベルの構造と無関係ではない。(田中, 2002, p. 195-6)

ここでは、社会的に流通し人々に共有されている「家族を養い守るのは、男の責任である」という「男性が何をすべきかを指し示す」ジェンダー規範がある男性行為者の「仕事を休まない」という行為を産み出していると理解されている。しかし、ここでひとつの疑問がわく。渋谷の言及する制度や構造とは規範に還元されるものだろうか。むしろ、個人レベルの被抑圧性のみに着目しては「おそらく制度的に埋め込まれている男性の「被抑圧性」を解消するのは困難」(渋谷, 2001, p. 76)と言及する際に想定されているのは、田中のあげた例に即して言うならば男性規範や個人の意識から独立した市場や労働法制のあり方などではないだろうか。多賀が言及するギデنزの構造を「社会システムの特性として組織される規則と資源」(ギデنز, 1989, p. 60)と定義する。ここでいう規則は当然、規範だけにとどまらず言語の文法や法律から明文化されない暗黙の実践的規則も含んだものとして考えられている。さらに、資源は身体やその行為に物理的に必要な「有形物だけでなく地位や威信のようなものも含み、両者[...]は自然と人間の支配(開発や搾取)をもたらす権力の源泉ともなる」(小幡, 1993, p. 246)。ギデنزにとって構造は規範にとどまらない幅広さを持っている。

以上のように一般的な社会理論においても渋谷の批判においても構造は男性規範以上のものと考えられている。さらに、田中と多賀は男性学に適した調査法として生活史インタビューをあげるが、男性の実践を規制する構造として男性規範のみを想定したうえでこの手法を用いても、その生成と変容のプロセスを明らかにすることはできないだろう。なぜなら、生活史インタビューはある男性がこれまで男性規範にどのように対応してきたかを問うものであり、男性規範の存在と内実をアプリオリに設定せざるを得ない。また、生活史インタビューは対象者が現在から過去を振り返るスタイルをとるため、個人の行為を脱文脈化してしまう。行為を社会的な文脈から独立させて分析したところで、その文脈である構造を捉えることは出来ないのではないだろうか。つまり構造として男性規範のみを想定することは、男性の実践を規定し、その実践によって変容、もしくは再生産させられていく構造の限られた側面しか明らかに出来ず、また、個人がどのようにその規範に対応してきたかを問うだけでは男性規範の実態を捉え

ることはできないのだ。結局、男性規範に議論を焦点化し続ける限り心理主義の乗り越えは困難といえよう。

2. 男性学と当事者主義

男性規範に議論を収斂させる傾向は田中と多賀の議論のみならず、多くの男性学研究者にみられる。⁴なぜこのようなことが起きるのだろうか。本章では、男性性について研究する上で研究者自身の男性としての被抑圧経験を重要視する当事者主義が男性学の本質的な特徴であることを確認した上で、それこそが問題の原因であると主張する。また、男性学が多様な男性像を描こうというスローガンとは反対に実際は男性を一枚岩的に捉えてしまっていること、そして、男性学が既存の「男性」カテゴリーを再生産していることを指摘し、その原因として当事者主義があることを明らかにする。

2.1. 当事者学としての男性学

男性学は、女性学が男性を描く時、過度に一般化させる傾向があったことに対する男性の不満から生まれたとされている(伊藤, 1996; 大山, 2000; 熊田, 2005; 須長, 1999; 多賀, 2001; 田中, 2002)。女性学とは「人間としての女性尊重の立場から、学際的に女性及びその関連の諸問題を研究する学問であり、女性の視点(立場)をもって既成の諸学問を洗い直すもの」(日本女性学会, 1979)である。「女による、女のための、女の学問」(井上, 1981)をキャッチフレーズとしていたことからわかるように、担い手の当事者性がきわめて重要視されている。一方、男性学も「男性の視点」から「男性の経験」を明らかにすることが目標とされている。具体的には、渋谷が、上野千鶴子による「女性学の視点を通過したあとに、女性の目に映る男性の自画像を通じての、男性自身の自己省察の記録」(上野, 1995, p. 2)という定義、伊藤公雄による「男性の視点から、この男性社会を批判的に解剖することを通じて、男性にとってより“人間らしい”生活を構想するための(それは、女性にとっても望ましいことだろう)“実践的な学”」(伊藤, 1996, p. 130)という定義をふまえ、「(1)男性および男性社会を研究対象とする、(2)肯定的であれ否定的であれ「女性学」の視点に意識的な、(3)男性の視点からの学」(渋谷, 2001, p. 71)とする。さらに、「(3)男性の視点からの学」を男性学の定義に含めていることから、「男性研究」を、女性が行う(1)、(2)を踏まえた研究としている(渋谷, 2001)。

これに対し、多賀は、英語圏の文献では、「男性学」や「男性研究」よりも、「男性と男性性研究」(research on men and masculinities)の呼称が広く用いられている(多賀, 2002, p. 2)ことを紹介しながらも、「とりわけジェンダーに関する研究は、その結果が現実の利害関係に及ぼす影響と、研究者の立場性(positionality)に自覚的でなければならない」(多賀, 2002, p.

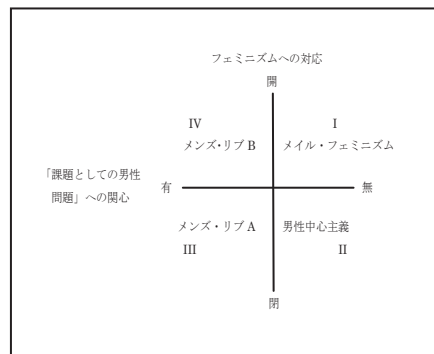
3)と主張し、「男性研究」を「女性学のインパクトを受けた、男性及び男性性を対象とする研究」(多賀, 2002, p. 3-4)とし、そのうち「男性の視点から行われるもの、あるいは女性学に対する男性からのリアクションとしての性格を持ち合わせたもの」(多賀, 2002, p. 4)を「男性学」としている。渋谷、多賀とも男性学とは、独立した問題関心をもっているという理由から、ゲイ・スタディーズを「男性学」の範疇には含めないという立場をとっている。表現に若干の違いがみられるが、どの定義も当事者性を強調している事に違いはない。これらをまとめると男性学は「男性の視点からなされる男性、男性性および男性社会の研究」と定義できる。このように男性学では定義という最も根本的なレベルにおいて当事者性が重要視されている。男性学において当事者主義は本質的な特徴であると言えよう。このようなある社会問題や現象の当事者自身がその事象を研究するスタイルの学問を当事者学と呼ぶ。当事者学の特徴は「非当事者が当事者を「客体」としてあれこれ「客観的」に論じるのではなく、当事者自身がみずからの経験を言語化し、理論化して、社会変革のための「武器」に鍛え上げていく、という実践性」(中西 & 上野, 2003, p. 16)にあるとされる。

2.2. なぜ男性学は男性規範に着目するのか

先に見たように渋谷は男性学が男性の被抑圧性を強調すると批判したが、この特徴はまさに当事者主義によって生み出されている。男性学では、男性が抱える問題、男性問題の固有性が問題とされている。そして、この女性問題からはある程度自律して存在する男性問題を扱うことに、男性学と女性学の違いがある(田中, 2005)。このようなフェミニズムへの男性の対応のあり方を伊藤は、以下のように図式化した(see Figure 1)。

これは、基本的にはメンズリブとフェミニズムの関係に関するものだが、男性学にも適用できる。この図によると男性学には、フェミニズムに対して肯定的なものと否定的なもの2つに大きく分かれる。⁵男性学は「女性学に対する男性からのリアクションとしての性格を持ち合わせ」(多賀, 2002, p. 4)ているだけであり、必ずしもすべてフェミニズムに肯定的なわけではない。しかし、フェミニズムに対して肯定的な評価を下していたとしてもフェミニズムとは違う「男性の視点」を生かそうとすれば、それは女性問題からは自律した男性問題、つまり男性の被抑圧性を語ることになる。男性の加害者性のみを議論することは女性学や「男のフェ

Figure 1. フェミニズムに対する男たちの対応 (伊藤, 1993, p. 181)



ミニズム」でもできるからだ。男性学の特徴は、男性問題の当事者である男性、つまり男性学研究者自身がその被抑圧経験をもとに男性問題を分析することにある。このように男性学が当事者主義を掲げることは、男性学が「男性の被抑圧性」を語ることにつながる。⁶そして、この被抑圧経験とは多くの場合、「男らしくあれ」というメッセージ、男性規範によってもたらされていると考えられている。例えば、学生運動に参加していた伊藤は、いわゆる内ゲバにしばしば男としてのメンツを理由に参加せざるを得なかったことが男性学を構想するきっかけになったことを明らかにしている(伊藤, 上野 & 蔦森, 1999)。また、大東貢生は、スポーツが苦手だった少年時代の経験が自身を「男性性とスポーツ」の研究に向かわせたとしている(大東, 2003)。さらに熊田一雄は、社会的にはエリートである自分が抱え込んだ苦しみを「よい子ホリック」とし、この生育歴と自身の研究の関連を語る(熊田, 2005)。このように当事者主義が男性としての被抑圧経験から議論を展開することを要求することが、男性学が男性規範にその関心を向けることにつながっていると考えられる。

2.3. アイデンティティ・ポリティクスのアボリア

男性学が当事者主義を掲げるこの問題性はその分析の範囲を規範に限定してしまう危険性があることのみにとどまらない。当事者学は、客観性をテーゼとする近代アカデミズムに対する大きな挑戦としてとらえられる一方、例えばフェミニズムにおいては白人中産階級女性の経験を「女性の経験」として一般化してしまい、当然、女性間にも存在する権力関係を等閑視していると批判を浴びた。アメリカにおける第二波フェミニズムの嚆矢とされる B. フリーダン(2004)による『新しい女性の創造』も郊外に住む主婦の苦しみ、つまり夫の給料だけで家族を養える中産階級の白人女性の問題を描いたものであった。これを「女性の被抑圧経験」と一枚岩的に語ることは、1980年代以降、世界的に批判されてきた。例えば、フェミニズムにおいて階級と人種による分断があることは、運動の現場で早くから指摘されていた(フックス, 2004)。また、レズビアンおよびゲイによる当事者運動の中でフェミニズムの異性愛中心主義が批判されてきた(ルービン, 1997)。さらに、ポストコロニアル・スタディーズの視点から先進国のフェミニズムがグローバルな資本主義の搾取構造にみずから取り込まれていることに無自覚的であることも批判もなされた(スピヴァク, 2003)。日本においてもフェミニズムおよび女性学で強調されてきた「女の視点」が実質的に「中産階級の女の視点」でしかなかったと振り返られている(中西 & 上野, 2003)。

このように「当事者の視点」を強調することは、「当事者の一枚岩化」を招き、時には当事者間にも存在する階級などその他の差異軸に基づく権力関係を隠蔽することになる。それでは、日本の男性学はどうだろうか？差異軸としてのエスニシティや階級が十分に意識化されてきた

だろうか。確かに、男性学では、男性の複数性をめぐる議論の中で、セクシュアリティや階級に着目することの重要性は指摘されている(伊藤, 1996; 多賀, 2006)。しかし、実証研究の対象としていわゆる社会的弱者が研究の対象として取り上げられることは少ない。示唆的なことにゲイ・スタディーズにいたってははっきりと男性学の定義から外されている(渋谷, 2001; 多賀, 2002)。

この問題も当事者主義によって生み出されている。1つ目の理由として、端的に言って研究者には社会的弱者が少ないことがあげられる。エスニック・マイノリティ、障害者などに関しては単純に一般社会においてその人数が少ないことが理由である。また、日本で研究者になるためには相当の文化資本と経済資本が要求される。このため、研究者の生育家族の階層分布が偏っていると考えられる。つまり、男性学にかぎらず研究者一般はそもそも社会的マジョリティである蓋然性が高い。そのうえ男性学では当事者性が強調されるため、研究者個人の経験やそれに基づく関心から研究が行われることが想像される。もちろん、全ての研究は、研究者の個人史と何らかの関連があるだろう。しかし、男性学をはじめとするジェンダーに関わる研究ではこの傾向がより色濃くなる。例えば、日本の男性学をレビューした佐々木は、日本の男性学には、「著者の実体験や成人男性が現実と直面している男性としてのアイデンティティ不安をどう解消あるいは乗り越えていくか」(佐々木, 2003, p. 275)ということをテーマにしたものが多いとしている。男性学研究者は、男らしさという点においては、抑圧的な経験をしてきているが、人種や国籍、階層といった点ではマジョリティであることが多いのだ。このような状況では、日本の男性学はどうしても社会的にはマジョリティとされる男性を対称として取り上げやすくなる。繰り返すが、この問題は社会学的な研究一般に言えることだが、男性学ではその傾向が当事者性を重要視しているがためにより強まるのだ。結果、「男の性もまたひとつではない」(伊藤, 1993, p. 163)という言明もむなしく「男の視点」を重要視する男性学は極めて限定的な男性のありようしか明らかに出来ないでいる。

2つ目の理由は「男性」というアイデンティティ・カテゴリーを基盤にして議論を展開することのより根本的な問題による。クィア理論を中心とする最近のアイデンティティ論においては、アイデンティティ・ポリティクスの当事者間の差異を隠蔽する働きのみならず、呼びかけられること、名づけられることのもつ本質的な暴力性まで議論の射程は及んでいる。クィア理論家である清水晶子によると「アイデンティティのカテゴリーを使って「わたしは……である」という時、我々は常に必ず、カテゴリーの過ちをおかす」(清水, 2006, p. 173)。なぜなら、「わたし」の一時的な要約を意味するにもかかわらず、そのように「わたし」を決定するわたしは、決定された「わたし」からは排除されており、「わたしはこのようなものである」という主張はその排除そのものを隠蔽することで成立」(清水, 2006, p. 173)しているからである。

アイデンティティ・カテゴリーを用いた「わたしは……である」という言明は、そのため「統制的な制度の手先になりがち」(バトラー, 1996, p. 116-117)だ。続けて、Butler は以下のように述べる。

「レズビアン」や「ゲイ」という呼び名によって全てが暴露されたり透明になったりはないが、その反面、抑圧された政治的支持者の勢力を盛り返すために、こういった必然的な言葉の過ち、つまり、いわば範疇についての言い間違い[...]を使わなくてはならないという政治的必要性が残るのである。(バトラー, 1996, p. 119)

Butler は「この用語の使用を禁止しようとしているのではない」(バトラー, 1996, p. 119)のだ。そうではなくて、「アイデンティティを手段として用いることが強制的な命令にならないようにするためには、禁止と使用の間にはどんなプレイがあるべきなのか」(バトラー, 1996, p. 119)と疑問を投げかけているのである。同じくフェミニストでありクィア理論の論者でもある E. K. セジウィックはアイデンティティ・ポリティクスについて以下のように述べる。

ゲイとストレートとを別種の人間として対比されることが自然で自明なことなのかを問うことは、(序章で見たように)その対比を解体することではない。おそらく、誰一人としてそのような解体を望んではならないのだ。この表象の支配の下で、十分多くの男や女のグループが、この主格となるカテゴリーである「ホモセクシュアル」や最近の類義語には、彼ら自身のセクシュアリティとアイデンティティとの経験をまとめ説明するために、実際の能力があることを認め、いずれにしてもそれを自分達で使うことに(ただ暗黙のうちになされるべきでさえ)、付随する非常に大きな犠牲を払うだけの十分な価値があることを見出しているからである。(セジウィック, 1999, p. 118)

このようにあるアイデンティティを用いることは排除と抑圧を必然的に生み出す。「男性」というアイデンティティ・カテゴリーは、それを用いるわたしを十全には表象しない。それはあくまで「一時的な要約」(清水, 2006, p. 173)にすぎないのだ。アイデンティティ・カテゴリーに根ざした学問を構想する日本の男性学が中産階級、異性愛、日本人の男性の問題しか議論の遡上にあげづらい究極的な理由はここにあるだろう。そこで用いられる「男性」というアイデンティティ・カテゴリーとは(中産階級)男性であり、(異性愛)男性であり、(日本人)男性しか意味しないのだ。この「男性」というアイデンティティ・カテゴリーを用いることの本質

的な暴力性を問題化しないまま議論を展開することは、まさしくその隠蔽された排除を延命させることを意味する。

3. 当事者主義を越えて

これまでの議論から男性学における心理主義の問題は当事者主義によって生み出されていることが明らかになった。また、当事者主義は心理主義だけでなく、「男性」カテゴリーの成立が不可避的に必要とする排除を延命させる危険性があることも明らかになった。本章ではこの課題を乗り越えるために必要な視点について議論する。具体的には、男性学がその歴史的役目を終えていること明らかにし、その上で男性性の批判的研究が今後、取り組むべき課題を提示する。

3.1. 男性学から男性性研究へ

これまでの議論で明らかになったように男性学における当事者主義が重大な問題をはらんでいるのであれば、現在におけるその意義を考える必要がある。男性学が、カテゴリーの不可避的な過ちを犯しながら、それでも当事者主義を掲げ続けることの必然性はどこにあるのだろうか。多賀は、欧米では男性学が「男性と男性性の研究」と称されるようになった現在も男性学が必要とされる理由を以下のように説明する。

われわれの社会が男性と女性を区別し、それぞれに異なる意味を付与し続ける限り、男性は、何らかの点で女性とは異なった男性独自の経験をし続ける。また、ジェンダー関係が固定的ではなく常に変化と多様性へと開かれたものであるならば、時代や状況に応じて男性の経験も様々な異なるはずである。したがって、より一般的なジェンダーの社会理論を構築する上でも、そうした理論の妥当性を常に検証していくうえでも、様々な男性の経験と男性性の意味を丹念に拾い上げていく男性学の実証的研究の蓄積は不可欠である。(多賀, 2006, p. 23-4)

ここでは、抽象的なジェンダーの社会理論と個別具体的な男性学とが対比されている。確かに、女性は経験しない男性独自の経験はある。多賀の言うとおりの「様々な男性の経験と男性性の意味を丹念に拾い上げていく」実証的研究は必要であろう。しかし、それは男性学にしか、つまり男性にしかできないのだろうか。男性学が構想された時期に比べ、女性研究者による男性研究は格段にその量を増やしている。男性学を名乗らず「様々な男性の経験と男性性の意味を丹念に拾い上げていく」実証的研究が増えてきていることは多賀自身の男性研究のレビュー

によって明らかにされている(多賀, 2002)。よって、多賀の主張は男性学、つまり男性と男性性を研究する上で当事者主義を掲げる必要性の根拠にはなりえない。

2章でみたように男性学が当事者主義を掲げることと男性であることの被抑圧性を語ることは本質的なつながりをもっている。女性学や既存の学問では男性の被抑圧性を語ることが困難だったことに当事者主義を掲げる必要性があった。多賀は、1990年代に盛り上がった男性運動が衰退している理由として、男性問題に着目するそのオリジナルな視点が彼らの活動、男女共同参画行政、日本経済の停滞による男性のライフコースの変容などを通じて陳腐化したことをあげる(多賀, 2006, p. 182)。アカデミズムにおいても同じことが言えるのではないだろうか。つまり、「男であることの困難」も「ジェンダー化された存在としての男性」という視点は、少なくともジェンダー研究の分野では一般化したのではないだろうか。現在では、当事者性を掲げなくとも分析の視覚としての男性性をジェンダー研究に取り込むことも可能である。男性学はジェンダーという言葉がアカデミズムに定着する以前、女性学および女性運動の主張を真摯に受け止めた男性研究者たちの「男はフェミニストになれるのか」という切実な問いから生まれたものでもある(中村, 2007)。しかし、その役割は歴史的なものであり、すでにその意義は十分に果たされたのではないだろうか。現在では、既存の男性と男性性の関係を再生産する危険を犯してまで当事者性を強調する必然性はないのではないだろうか。

しかし、それは男性性を批判的に捉えなおそうとする試み自体の必要性を否定するわけではない。むしろこのことは男性学とは別の仕方での男性性の分析が必要とされていることを示唆している。当事者主義を掲げる男性学は「男性」カテゴリーを用いることを通して、その成立のために必要とされる排除を隠蔽することに加担する。これを乗り越えるためには、そこでのどのような排除が隠蔽されていることを見極める必要がある。ここではその具体的方法としてジェンダーと他の社会構造の相互作用を分析することを提案する。

3.2. ジェンダーと他の社会構造の相互作用

前章で見たように、日本の男性学は「男性」というアイデンティティ・カテゴリーをもとに議論を展開するので、とりあげる男性像は日本社会において一般的に「男性」と想定されるものにとどまる傾向がある。そこで取り上げられる「男性」とは、おそらくは(異性愛)男性であり、(日本人)男性であり、(中産階級)男性である。日本の男性学は、主体化の過程を純粋なジェンダー化の過程として捉えており、その過程の複雑性を無視してしまっている。これを乗り越えるには、まず相互に影響を与え合っている差異軸に着目することにより、対象の経験を捉える必要がある。それは、ただ単に対象者の範囲を限定することを意味しているわけではなく、またマイノリティ男性の経験を語ることを意味しているわけでもない。例えば、「日

本人の中産階級の異性愛男性」といったように対象と研究の範囲を限定する試みは、政治的な正しさのようなものを担保することにしかならない。特に、マイノリティに対してこのような手法をとることは、彼らがおかれた周縁化された状況を再生産するだけに終わりがねない。重要なのは、渋谷が批判する「男らしさの複数形」論のもととなったConnell自身が繰り返し述べているように、ジェンダーおよび男性性が他の社会構造と「交差 (intersects)」より正確には相互作用 (interacts) (Connell, 2005, p. 75) しているという視点であろう。Connellは、労働者階級男性の男性性、黒人の男性性といった男性性の類型化が男性性の実体化につながると批判する。Connellにとってジェンダーとは「特定の形の実践ではなく、一般の社会実践を構造化するものであり、他の社会構造と不可避的に関係づけられている」(Connell, 2005, p. 75) ものである。日本の男性学は、その当事者主義ゆえに「男性」カテゴリーと男性規範に拘泥してしまい、そのためジェンダーが他の社会構造と複雑に絡み合っている状況を見落としてしまっている。この見落とされている他の社会構造との相互作用こそが清水のいうアイデンティティ・カテゴリーが成立する際、排除されるものであり、「男性」カテゴリーを用いる男性学はそのような排除自体を隠蔽することによって成立している。

Connellの提示するような視点を実証研究に活かした例としてB. スケッグス(1997)の『Formation of Gender and Class』がある。スケッグスは、最近のフェミニストによる文化・社会分析において階級の視点が失われているという認識のもと、労働者階級女性の主体化のプロセスを明らかにしようと試みた。彼女は労働者階級が多く住む地域に住み込み、約10年間にわたってインフォーマントを追い続けた。階級とジェンダーが複雑に絡み合いつつ「労働者階級女性」という主体が産出される様を丹念に追った彼女の研究は、男性性の社会学的研究にも大きな示唆を与えたと考えられる。

この研究の特徴は、1つめに昨今のフェミニズム理論において重要性が低下せしめられている階級の問題を取り上げ、特に労働者階級女性を研究対象としていること、2つめに労働者階級女性の主体化の過程をつねに中産階級女性との関係性のなかで行われているものとして捉えたこと、3つめに労働者階級女性の主体化の過程をジェンダー、階級、セクシュアリティ、人種など多面的な要素が絡み合っており成り立っているものと捉えたこと、である。スケッグスの議論は重要であるはずなのに語られることが少なくなってきていたテーマを取り上げたということにとどまらない。また、労働者階級女性の経験にこだわりながら、それを中産階級女性の経験とは異なる「労働者階級女性特有の経験」として実体化させることがない。彼女は、労働者階級女性という社会的にも学術的にも「周縁化」された人びとの経験を再構成することを通してジェンダーと階級の同時的な形成というより一般的な問題の様相を明らかにしている。そのため、彼女たちが「周縁化」されているその状況を少なくとも無批判的に再生産することが

らは距離を取ることに成功している。日本の男性学はスケッグスに習い、ジェンダー化された主体の形成プロセスではなく、ジェンダー化もそのなかに織り込まれている主体化のプロセスを問うべきではないだろうか。

4. 結論

本論文では渋谷、田中、多賀の男性学の方法論をめぐる論争を参考に男性学が抱える方法論的課題を同定し、それを乗り越えるための方法について議論した。三者の論争においては、男性学が個人レベルの被抑圧性に着目する傾向があることを前提としながら、そのような個人レベルの問題が構造的な問題と結びつくかどうか争われていた。この論争の中で、田中と多賀は男性個人のジェンダー実践とジェンダー構造が相互関連的な関係にあるため、個人レベルの被抑圧性に着目することから男女を非対称的に編成する構造を捉えることは可能だと主張していた。しかし、両者はこの構造として男性規範しか想定していない。渋谷の議論においても社会理論においても構造は規範にとどまらない幅広さを持つものと考えられており、彼らの方法論では構造のきわめて限定的な側面しか明らかにできない。また、両者は男性学に適した調査法として生活史インタビューを提示していたが、ジェンダー構造として男性規範しか想定しないのでは、男性規範に男性個人がどのように対応してきたかを明らかにできてもその生成と変容の動的なプロセスは明らかにできない。

次に、このように男性学が男性規範にその関心を焦点化させることと男性としての被抑圧経験を議論の根本に据える当事者主義と関係について議論を展開した。男性学の当事者主義は、女性学が語る性差別の加害者としての男性像が当事者としての経験から乖離していることを批判するためのものであった。そこで重要視されたのは男性であることの被抑圧性であり、それゆえ、男性学は男性を心理的に抑圧する男性規範に関心を注ぐことになった。また、当事者主義がたんに男性学の議論の射程を限定するのみならず、人種、階級、国籍、セクシュアリティなどに依存しながらその依存を隠蔽することによって成り立つ「男性」カテゴリーを延命させていることも議論した。最後に、当事者主義を掲げる男性学が「男性の被抑圧性」と「ジェンダー化された存在としての男性」という視点が一般化したため、その歴史的役目を終えていることを確認した。このような認識のもと当事者主義の課題を乗り越えるためには、ジェンダーが他の社会構造とどのように相互に関係しあいながら成立しているのかを問う視点が重要であると提起した。

ゲイネスや階級性、人種性を排除することで成立する「男性」カテゴリーを用いることは複雑な主体化のプロセスを脱文脈化し、純粋なジェンダー化のプロセスを問おうとするものである。しかし、ジェンダー化はそのような純粋なプロセスではなく他の社会構造と不可避

的に絡み合い、またその絡み合いを「解剖学的な知」でもって隠蔽しながら進行する。男性性の批判的な研究は、「男性」カテゴリーを与件とせず複雑な主体化のプロセスにおいて（再）産出されるものと捉えることを必要としているのではないだろうか。

【付記】

本稿は、2007年3月国際基督教大学教授会提出学士論文「男性学における方法基準の批判的考察」を加筆訂正したものである。

Reference

- 伊藤公雄.(1993).『<男らしさ>のゆくえ——男性文化の文化社会学』.東京:新曜社.
伊藤公雄.(1996).『男性学入門』.東京:作品社.
伊藤公雄.,上野千鶴子., & 蔦森樹.(1999).「はじめて語るメンズリブ批評座談会」.In 蔦森樹 (Ed.),『はじめて語るメンズリブ批評』(pp. 254-278).東京:東京書籍.
井上輝子.(1981).「女性の、女性による、女性のための学問」.In 女性学研究会 (Ed.),『女性学をつくる』(pp. 55-61).東京:勁草書房.
上野千鶴子.(1989).「メンズリブが必要だ」.『現代思想』, 17 (10), 38-53.
上野千鶴子.(1995).「「オヤジ」になりたくないキミのためのメンズ・リブのすすめ」.In 井上輝子,上野千鶴子 & 江原由美子 (Eds.),『日本のフェミニズム別冊 男性学』(pp. 2-33).東京:岩波書店.
上野千鶴子.(2002).『差異の政治学』.東京:岩波書店.
上野千鶴子.(2006).「ジェンダー研究の変遷と男性学の可能性」.『ドレスタディ』, 49, 4-9.
大東貢生.(2003).「男性にとってのジェンダーフリー——運動音痴の男の子の視点から」.『解放教育』, 33(1), 23-28.
大山治彦.(2000).「女性学と男性学」.In 女性学教育ネットワーク (Ed.),『女性学教育の挑戦: 理論と実践』(pp. 34-37).東京:明石書店.
片田孫朝日.(2003).「社会的スキルとしての男性性——学童保育所の男子集団の遊びにおける相互行為の分析から」.『ソシオロジ』, 48(2), 23-38.
片田孫朝日.(2005).「男子のジェンダー実践の共同性と文脈性:学童クラブの男子の遊び活動に関する相互行為の分析」.『京都社会学年報』, 13, 61-84.
熊田一雄.(2005).『“男らしさ”という病?——ポップ・カルチャーの新・男性学』.東京:風媒社.
倉本智明.(1998).「盲人男性は「美人」に欲情するか?——晴眼社会を生きる盲人男性のセクシュアリティ」.『視覚障害リハビリテーション』, 48, 69-76.
小幡正敏.(1993).「解説 再帰性と近代」[Commentary on the book『近代とはいかなる時代か?—モダニティの帰結』].In アンソニー・ギデンズ,『近代とはいかなる時代か?—モダニティの帰結』(松尾精文 & 小幡正敏, Trans.) (pp. 243-251).東京:而立書房.
佐々木正徳.(2003).「韓国における男性性」研究の意義に着いての一考察」.『九州教育学会研究紀要』, 31, 273-280.
佐々木正徳.(2005).「男性性研究の動向と展望: 社会化からエージェンシーへ」.『飛梅論集: 九州大学大学院教育学コース院生論文集』, 5, 175-195.
須長史生.(1999).『ハゲを生きる』.東京:勁草書房.
スピヴァク, G. C. (2003).『ポストコロニアル理性批判—消え去りゆく現在の歴史のために』(上村忠男 & 本橋哲也, Trans.).東京:月曜社.

- 渋谷知美.(2001).「フェミニスト男性研究」の視点と構想」.『社会学評論』, 51(4), 447-463.
清水晶子.(2006).「キリンのサバイバルのために—ジュディス・バトラーとアイデンティティ・ポリティクス再考」.『現代思想』, 10月臨時増刊号, 34(12), 171-187.
セジウィック, イヴ・コスフスキー.(1999).『クローゼットの認識論—セクシュアリティの20世紀』(外岡尚美, Trans.).東京:青土社.
多賀太.(1996).「青年期の男性性形成に関する一考察—アイデンティティ危機を体験した大学生の事例から」.『教育社会学研究』, 58, 47-64.
多賀太.(2001).『男性のジェンダー形成——〈男らしさ〉の揺らぎのなかで』.東京:東洋館出版.
多賀太.(2002).「男性学・男性研究の諸潮流」.『日本ジェンダー研究』, 5, 1-14.
多賀太.(2006).『男らしさの社会学——揺らぐ男のライフコース』.京都:世界思想社.
田中俊之.(2002).「<研究ノート> 男性性の社会学的考察のために」.『ソシオロジスト: 武蔵大学: 武蔵社会学論集』, 4, 183-202.
田中俊之.(2005).「男性問題とは何か—フェミニズム以降の男性をめぐる言説」.In 社会科学基礎論研究会 (Ed.),『社会科学基礎論研究 第4号』(pp. 114-131).東京:ハーベスト社.
中西正司., & 上野千鶴子.(2003).『当事者主権』.東京:岩波書店.
中村彰.(2007, June 2).「男性が心豊かに生きる環境をめざして—男性運動15年の実践事例から—」.Paper presented at the 第41回日本文化人類学会研究大会.
日本女性学会.(1979, June 18).「日本女性学会設立趣意書」. Retrieved January 4, 2008, from <http://www.joseigakkai-jp.org/>
フックス, ベル.(2000).『フェミニズムはみんなのもの——情熱の政治学』(堀田碧, Trans.).東京:新水社.
バトラー, ジュディス.(1996).「模倣とジェンダーへの抵抗」(杉浦悦子, Trans.).『imago』, 7(6), 116-128.
バトラー, ジュディス.(1999).『ジェンダー・トラブル—フェミニズムとアイデンティティの攪乱』(竹村和子, Trans.).東京:青土社.
林道義.(1996).『父性の復権』.東京:中公新書.
フライ, ロバート.(1996).『アイアン・ジョンの魂』(野中ともよ, Trans.).東京:集英社.
フリーダン, ベティ.(2004).『新しい女性の創造』(三浦富美子, Trans.).東京:大和書房.
宮下さおり.(2006).「男性研究の現在と日本のジェンダー分析: 男性稼ぎ手役割を例として」. Paper presented at the 第112回日本社会政策学会大会報告. Retrieved January 4, 2008, from <http://www.soc.nii.ac.jp/sssp/112taikai/T8-1Miyashita.pdf>
ルービン, ゲイル.(1997).「性を考える—セクシュアリティの政治に関するラディカルな理論のための覚書」.『現代思想』, 25(6), 94-144.
Connell, R. W. (2005). *Masculinities* (2nd ed.). Berkeley: Univ. of California Pr.
Louie, Kam., & Low, Morris. (Eds.). (2003) *Asian Masculinities: The Meaning and Practice of Manhood in China and Japan*. Richmond: Curzon Press.
Roberson, James & Suzuki, Nobue. (Eds.). (2002). *Men and Masculinities in Contemporary Japan: Dislocating the Salaryman Doxa*. London: Routledge.
Skeggs, Beverley. (1997). *Formations of Class and Gender: Becoming Respectable*. London: Sage Publishing.

Footnote

- ¹ 男性性の批判的な研究は英語圏にとどまらない。例えばドイツでは、日本でも紹介されたトマス・キューネなどに代表される男性性の歴史研究が盛んである。
² 英語で発表された日本社会を対象とした男性性研究として『Men and Masculinities in Contemporary Japan: Dislocating the Salaryman Doxa』(Roberson & Suzuki, 2002).『Asian

Masculinities: The Meaning and Practice of Manhood in China and Japan』(Louie & Low, 2004) などがある。

³ <男性>は生物学的な意味での男性を、「男性」は常識的に把握される社会的な存在としての男性を意味している。

⁴ 渋谷の批判する伊藤の「男らしさの鎧」論もこのような議論のひとつと言える。

⁵ 日本では男性学はフェミニズムに肯定的なものと捉えられる風潮があるように思われるが、アメリカではロバート・ブライ(1992)などフェミニズムに否定的な男性学も存在する。例えば林道義の『父性の復権』(林, 1996)などもアメリカでは男性学的な試みと捉えられる可能性がある。

⁶ このことから渋谷が「男性の被抑圧性」を語る男性学を批判することと当事者主義を擁護することは矛盾していることがわかる。

A Critical Analysis of the "Party-Central" Approach in Men's Studies Ryo KAWAGUCHI

This paper contemplates a new perspective in masculinity studies through a critical analysis of the so-called *tōjishashugi** or the "party-central approach" that is fundamental in men's studies. Arguments in men's studies tend to be developed with heavy reliance upon men's own experiences of oppression. This leads to an undue focus on analyzing the norms of masculinity, which are in fact only one aspect of the overall relationship between social structures and the everyday reality of men. It can also constrict people with diverse and sometimes conflicting experiences into the category of "male." In order to overcome this problem, there is a need to break away from "the party-central approach" and to focus instead on the interplay of gender and other social structures. This interplay is indeed what becomes concealed when the category of "male" becomes established. It can be argued, therefore, that the "party-central approach" in men's studies based upon the premise of a "male" category is no longer valid, and that a new perspective in masculinity studies is now required.

Keywords: men's studies, masculinity, party-central approach

* *tōjishashugi* refers to analysis and policy-making that values the first-hand accounts of the parties involved rather than objective expert analysis.

